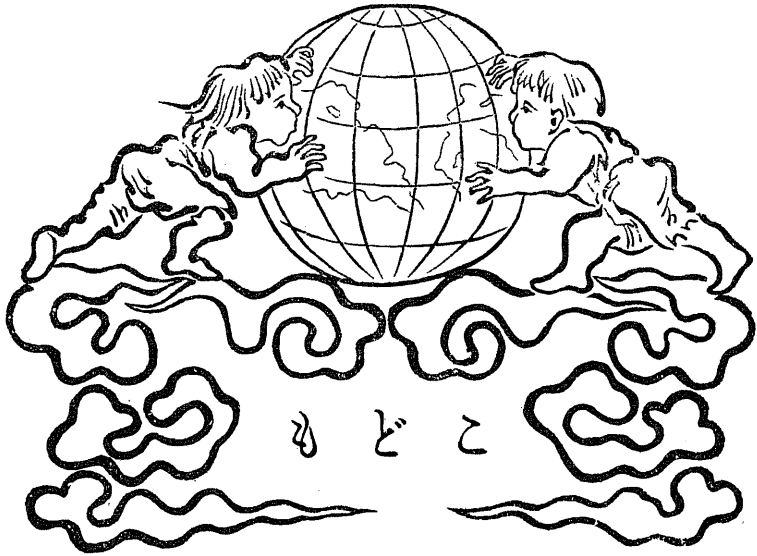


もど子と人婦  
號參第卷參第



蛇ひ姫め

やまとの翁

さて、いろ／＼とお話を  
 してきましたが、こんどわ  
 一ッロシアの昔話むかしばなしとゆーの  
 をして見ましょー。

ロシアの、ある田舎いなかに一  
 人の大百姓おほひやくしやうが居まりましたが  
 澤山たごさんな雇人やとにんの中に、釜藏かまぞうと  
 ゆーのがありました。至極しごく

正直な者でありましたが、平生他の雇人とは、決して、交際を  
 しません、で、何日でも一人ぼっちです。そこで、他の雇人ど  
 もわ、いろくつと一所に、遊ぶよーに、さそって見ましても、  
 中々聞きませせん、いつの間にか、ずーっと抜けて行って、野だ  
 の山だのえ行って、獨りで遊んで居ます。

ある日のこと、釜藏わ、休みの時間になつてから、いつもの  
 様に、一人っぼちで、ぶーらくと山の方え出掛けました。だ  
 んくと、行って、も一人の家などから、よっぽど遠い山の方  
 まで行きました、ひょいと見た所が、夫わく大きな一匹の蛇  
 が、ぐるぐつと身体を巻いて、恐ろしい鎌首をもちあげて、  
 ぺろっぺろつと赤い舌を出して、おまけに恐い目附きをして、

釜藏の方を向きながら、申します。

『己は今直、お前さんを呑もーと思う所なんだ』

けれども釜藏わ、平生から山路の寂しさに馴れきって居ますから、少しも恐れません。夫で、其蛇に向って答えました。

『さーく呑もーと思うんなら、どーか呑んで下さい』  
すると、蛇わ、一寸考えて

『いーや、呑むのわ、止そーよ、其代り己のゆー通りのことをやらなくっちゃ可けない』といーながら、釜藏のする事を申します『さー、これから、直家え歸って見なさい、屹度、主人が、お前さんが、あまり永く遊んで居たとゆーので、怒って居るに違ない。なぜかとゆーに、畑に乾した稻を誰も取り片つける人

が居ないのだから、だから、お前さん歸つたら、すぐ夫を片附  
 けに行けとゆーだろー、其時已わ、お前さんの手傳をしてやる  
 のだから、其稻を一度に、車に積み込んで仕舞うのだよ、但し  
 一把だけは残して置いて、賃金の代りに主人から、夫を頂く事  
 にしなさい。決して錢で貰つてわ、行けない。そこで、夫を頂  
 いたら、畑の中で、夫を燃すとゆーと、其畑の中から、美しい  
 お姫様が出て来るから、其お姫様を、お嫁さんに貰うのだよ』  
 そーいって置いて、蛇わ、のさくと草の茂みえ這入って仕  
 舞いました。釜藏は、不思議に思いました、夫から、家え歸  
 って見ると、蛇の言つたよーに、主人わ大變怒って、すぐ畑え  
 行って、稻を取り片附けろと申しますので、畑え行って、其仕

事にとりかゝつた所が、さう其仕事の速い事といったらぬ位、瞬く中に車に一杯積み込んでしまった。そして、主人の所に歸つて庫の中え片つけましたが、主人から決して錢を貰をいとわしない。たゞ畑に残った、一把の小さい稲束を欲しいといつて、願いました。そこで主人から、其束を頂いたもんですから早速蛇にいで付かった様に、畑の中で、夫を燃やした所が、不思議にも其畑の中から、夫わく奇麗な、美しいお姫様が一人ふわーつと出て來ました。釜藏も、之にわ吃驚しましたが、何しろ美しいお姫様だから、すぐと婚禮をして、お嫁さんにしました。

そこで、今度わ、夫婦の住む家を立てなければならぬとゆー

騒さわぎになりましたが、主人しゅじんわ、釜藏かまぞうの忠義ちゅうぎの褒美ほびに、廣ひろい地面ぢめんをくれましたので、早速さつそく普請ふしんにとりかゝると、釜藏かまぞうのお嫁よめさんわ、もー一生しゆくせん懸命けんめいで手傳てづかいをする。夫それで釜藏かまぞうわ、大方うけかた自分で働はたらかない中うちに、もー立派りつぱな家うちができてしまった。道具どうぐなどもちやーんと、揃そろって出来できて居いる。釜藏かまぞうわ、どーも不思議ふしぎで堪たらない。たゞもー、そこいらを歩あるき回まわってわ、出来でき上あった家うちを眺ながめて居いる許ばかり、何かなほしいなと思おもうと、ちやんと出来できて、使つかうよいになつて居いる。村中むらぢゆうで、釜藏かまぞうの家うちほど立派りつぱなのわ、一軒いっけんもない。

こーゆー風かぜで、釜藏かまぞうの家うちわ、だんくと金持かねもちちになつてきま

\* \* \* \* \*



したが、ある日のこと、他所から、歸つて來た所が、雇人の申  
 八  
 しますにわ、

『旦那さま、も一稻わ、すっかり實が入つて居りますに、一つ  
 も取り入れてありませぬよ』

釜藏わ、此時分、ちよーど三十町ほどの畑を持って居ました  
 が、今が稻の取り入れ時であつて、お嫁さんが折角働きわ、働  
 いたのだが、まだ澤山畑に残つて居たのです。

そこで、釜藏わ、雇人のゆーことを聞いて『一体何のこつた』  
 と思ひましたが、忽ち怒り出して、大聲で罵り出した。『ハ、一  
 そーだ。どーせ、一度蛇だつたんだもの。蛇だけの事しか出來  
 ないのだ』



何でも、おかみさんが、働かなかったからだとゆーので、大  
 變に怒り出して、すぐ家の中へ駆け入って見た所が、中には  
 お嫁さんの影も形も見えない。よくよく見た所が、さー大變、  
 寢間の所に、大きな大きな、一匹の蛇が、ぐるぐると、身  
 体を巻いて、鎌首をもち上げて居る。釜藏わ、ハッと行って、  
 忽ち思い出したのわ、最初、お嫁さんが『決してく妾に、蛇  
 とゆー言葉を聞かして下さるな、若し蛇とゆーことを言ったら  
 妾しわもーこゝに居られないのだから』といったことである。  
 釜藏わ、今夫を思い出したのだが、もー遅かった。言って仕舞  
 ったことわ、取り返す譯にわ行かない。そこで、だんくと考  
 えて見ますと、いかにも、いーお嫁さんだった、親切である

し、よく働いてわかれるし、數知れぬ善い事をして呉れた此お  
 嫁さんを、たった一言、自分が約束を守らなかつた爲に、も一  
 取り返しの附かぬことにしてしまつたとわ、何とゆ一情ない事  
 だらう、などう、思うと、も一堪らなくなつて思わずハラハ  
 ラッと涙を流して泣きだしました。

すると、其蛇がいゝますにわ、『あ一夫程私しを思つて下さる  
 のですか、けれども出來て仕舞つたことはも一仕方がありま  
 せぬから、ど一か泣かずに居て下さい。さっきお怒りになつた  
 のわ、あの畑の稻のことでしょう、けれども、庫え行つてごら  
 ん、も一ちやんと取り入れて、あなたの爲に、みんな白で搗い  
 て置きました。あゝ、只今から、も一お別れしなければなりま

せん』といつてぞろ／＼と這つて行きます。

釜藏かまぞうわも、悲かなしくつて悲かなしくつて仕様しやうがないから、蛇へびの這はつて行く方はえ行く方はえと、附ついて行いきます。丁度ちやうど死しんだ人びとのお葬むすらいにでも行く様ように泣ないて／＼泣なきくづれて、つゝいて行いきますと、と／＼前まへに蛇へびに遭あつた、奥山おくやまえ行いきました。さて、大おほきな木きの茂しげつた所ところまで行いきますと、蛇へびが留とまつて又またくる／＼と身体からだを卷まいて、鎌首かまくびを立て／＼い／＼します。

『せめて、今迄いままで私わたしを大だい事じにしてくれた恩返おんがへしを致いたしたいと思おもいますから、ど／＼か一いち度ど、私わたしの頭あたまを撫なで／＼下ください』とい／＼しますので、釜藏かまぞうわ、涙片手なみだかたてに、蛇へびの頭あたまを撫なで／＼やりますと、『さ、あなたのお心持こころもちわ、ど／＼にかなりましたか』と問といます。釜藏かまぞう

わ、『今お前の頭を撫でるとすぐ、私わ、世界中の事わ、何でも分る様に思われて来た』と答える。すると蛇わ、も一度頭を撫でよくれといって、又撫でよやると、『今度わ どーなりました』と聞く、釜藏わ『今度わ 世界中の人の言ふ事がみんなよく分る様に思われて来た』と答える。そこで蛇わ、『も一度撫でよ下さい、これがお仕舞いだから』とゆーので 釜藏わ お仕舞に撫でよやると、『今度わ どうなりました』と聞く、釜藏わ『地面の下の事が、すっかり分る様に思われる』といーましたそこで、蛇の申しますにわ、『夫なら、今から天子様の所えお出でなさい。屹度天子様わ、あなたが物知りだとゆーので、私の代りにお姫様をくれます。けども、どーか私をお忘れない

で、私の爲に神様に祈って下さい。私わこれから、いつまでも蛇で居なければなりません』と行って、とーく藪の中へ這入って仕舞いました。けれども釜藏わ、夫から天子様のお姫様を貰って、お仕舞まで、幸福でしたとさ。



めでたしく。